

隠喩としての姦通

—檀一雄「火宅の人」恣論—

花田俊典

一

たとえばトニー・タナーは小説における△姦通▽について、こう述べている（高橋和久・御輿哲也共訳『姦通の文学』朝日出版社、昭61・6）。

小説が好んで扱ってきたのは、家族の運命の起伏、変遷であり、われわれもよく知っているとおりに、その不変のテーマの一つは結婚にいたるまでの紆余曲折をはらんだ経緯に他ならない。しかし私が主張したいのは、その隠されてはいるが真の関心は、家族の中の弱点や潜在的な裂け目、その断絶や分裂に、常にひきつけられてきたということなのである。だからこそ小説は、ほとんど抗いがたく姦通の問題にこだわり続けるのだろうか。

ひとつの隠喩として△姦通▽があるのは社会一般にいわば一夫一婦制の近代家族観が定着してきたからにはほかならないが、たとえどう制度が違犯を手なづけ、とりこもうとつとめても、△姦通▽は「家族の中の弱点や潜在的な裂け目、その断絶や分裂」を「抗いがたく」あらわにする、まさに挑発的な侵犯行為であるだろう。

もとより一夫一婦制に対する違犯は、ただそれだけの意味にとどまるのではない。「愛—性—結婚のロマンチックラブ・イデオロギーが作り上げた『近代家族』がブルジョア単婚家族というものであった」（上野千鶴子^{注2}）とすれば、おのずから△姦通▽はいわばひとつの文化形態への侵犯の様相をおびてくる。

△妻▽の姦通は以前からそのような挑発性にみちていた場合が多い。が、△夫▽のそれが秩序破りどころか制度維

持のための補完装置のごとく見なされてきたのは、文化レベルにおいて男／女の一夫一婦制の契約が対等でなかったからにすぎない。△夫▽が支配者であるかぎり、制度からの離脱も還帰も秩序の枠内ではなれば平然と可能であって、だとすればそれは、家族（夫婦）内事件より以上の隠喩をもちえない。

ここに従来の△姦通▽の文学がもっぱら△妻▽の違反のみを話題にしてきた最大の理由のひとつがあるだろう。△妻▽の姦通はいわゆる文学的事件たりえるが、△夫▽のそれは日常性の枠組内の小さな一過性の出来事としか受けとられなかったのである。

だが、△夫▽の姦通は、いまだ挑発的な隠喩たりえないのか。もし夫が妻や愛人に対して、いわば支配者としての権限でなく、経済的扶養の義務と誠実な良心的負い目の持ち主であったとしたら。

桂一雄は数えどし四十五歳になる作家である。十余年前に十歳下の妻ヨリ子と再婚し、家庭は日々五人の子どもたちのたくましい喧嘩にあけくれ、それをむしろ好ましいと思っている。が、ひとり彼は「まるで姨捨の姨みために、荒涼の山奥に棄てられてしまった感じ」につかれている。

まるつきり駄目なのである。仕事らしい仕事も出来ぬ。ぜんぜん見とおしというものが無い。ヤミクモに

書いて、ヤミクモに浪費しているだけで、人間何モノカ……心の眼はチラとも開かず、現代の姨捨は澄み透る月影の片鱗をだに見ない。

その彼に、「奥秩父ニテ落石ニ遭イ、助骨三本ヲ折ル」事故と、「次郎発病、日本脳炎ト診断サル」という「凶事」が、二年つづけて同じ頃に「積み重なった」。

これらの不吉な出来事の連鎖に対する、恐怖と憤怒の入り混った、甲高い激昂のなかで、私は久しいこと優柔不断の恋情を抱きつづけてきた恵子を、ハッキリと、旅に連れ出してしまったのである。

誰にも打明けられることの出来ない自分の憂悶に対して、自分から爆弾を仕掛けるような、狂おしい、無目的な、復讐であったとも云える。

しかし、まさか次郎の発病が、恵子の出来事のほんとうの原因であったなどと、ここでおためごかしを云おうとするようなつもりはない。情痴である。十年に互る躊躇逡巡の不決断な恋情の総決算だ。

彼は落石事故や次郎発病によって生じた日常性のわずかな裂け目を拡大し、「誰にも打明けられることのない自分の憂悶に対して、自分から爆弾を仕掛けるよう」に、矢島恵子と△姦通▽し、不羈奔放な同棲生活にはいつてゆく。

ただし、この「憂悶」は「十年に互る躊躇逡巡の不決断

な恋情」に由来するにとどまるのではない。「次第に鬱積して狂おしくなっている恵子への惑いの心」とは、ひとつの隠喩として彼自身にも意識されている。だから、彼はこう思う。

家庭は破棄したくないが、しかし、私を信じきれぬならば、私も自分を天然の旅情に向ってどえらく解放してみたい。

私は四十五だ。遅過ぎたが、残りの太陽をかかげるのに絶望の時ではないだろう。子供達の生涯は、またおのずと私とは無縁のものである筈だ。

あるいはまた、矢島恵子への「情痴」は彼のなかで、こゝもとらえられている。

私は馴れるにつれてすっかり忘れてしまっていたが、恵子が、私の死んだ先妻とおなじ博多の女であるという、何と云うか物恋しさが、私の情痴のそもそものかくれた誘引になっていたかもわからない。いや、博多の女であるというよりも、博多の方言を使っていることによる、ある一種の甘さ、親近感。

これはしかし、恵子が、死んだ女房リツ子とおなじ方言を使うというよりも、むしろその大本に、私自身の、青年時代への郷愁があるとも云えるだろう。こういった思いを背景に揺曳させながら、桂一雄は矢島

恵子への「情痴」にみずからを駆り立てる。

もうひとつの△愛▽が夢見られているのではない。「恋情」である。「情痴である」。

情痴に高いものはない。しかし、格別低いと云うこともないだろう。人間の生きているままの出来事だから……。

私は十年以上の間、今の細君と、先ずまあ平穩な生活を続けてきた。しかし、それが必ずしも愛と云えるかどうか。もし、愛と呼べるなら、愛とは男女を持続して管理する生活術のようなものか。

その生活術の均衡を失って、もう少し素朴でももう少し直接の人間の情にいた時に、これを情痴と呼ぶのだろうか。

彼によれば、「婚姻の制度は、人間社会の安穩に、いささかの貢献をした。しかし、結婚が暗黙のうちに私達に要求する徳義や忍耐は、少しばかり大き目に過ぎるのである」という。男女はあくまで「男女の天然の性情」につきべきだという。

とすれば、矢島恵子との同棲生活にやがて破綻が待ちうけているのは必至といわねばならない。はたして、「嫉妬」の芽ばえと増幅が、そのときをもたらすこととなる。

あとは放浪しかない。生活とか日常といったことどもと

無縁の場所で、彼は生きるしかない。物語の終りちかくで、だから彼はこうつぶやくのである。

私が辛うじて憩うのは、いつも、愛の思惑を棄てた女性達の膝のもとであった。菅野もと子、実吉徳子、瀬野セイ等、わざわざ数えたててゆかなくとも、彼女らの色情の透明さばかりが、私を他愛なくなごませ、はげましてくれたようなものだ。

のちに作者自身、『火宅の人』とは、孤独の喜びを自覚するまでの長い時間の物語だと言えるでしょう」と語っている（「われ天涯に一人」波 昭50・11）。ならば「孤独の喜び」の「自覚」——、そこへと桂一雄の△姦通▽の隠喩はどこどいていと、ひとまずいって置いてよいかもしれない。

二

「よし、己の天然の旅情にだけは忠実であれ」、と桂一雄は「時には、呪文のように」して、くりかえしつぶやく。

この火宅の夫は、とめどなくちぎれては湧く自分の身勝手な情炎で、我が身を早く焼き尽してしまいたいのである。しかし、かりに断頭台に立たせられたとしても、我が身の潔白などは保証しない。いつの日にも、自分に吹き募ってくる天然の旅情にだけは、忠実でありたいからだ。

それが破局に向うことも知っている。

かりに破局であれ、一家離散であれ、私はグウタラな市民社会の、安穏と、虚偽を、願わないのである。かりに乞食になり、行き倒れたって、私はその一粒の米と、行き倒れた果の、降りつむ雪の冷たさを、そつとなめてみるだろう。

この桂一雄の覚悟は、ほぼそのまま檀一雄の年来の信條にかさなるわけで、たとえばエッセイ「一人で金槌をもつてする」（「思潮」昭24・5）とよみあわせると、そのあたりがよくわかる。

そこで彼は「恰度二年前の事^{注3}」として、湖南の六塘での稀有な至福の体験を語る。

僕は路傍の清流に青んでいる野芹の状を、ぼんやりとみつめながら、まったく放念して歩いていた。兵士一人見当らない。土民の影一つない。僕は嗚咽するでもなく、さりとて幸福でもなく、いや醒めきった空虚という風なものを、肉体の隅々で朧ろげに予感しながら歩いていた。

僕の足は、さながら我々を放った根源のものに、歩み進んで行くふうだった。今日と古代とが、一本の白日の光に申伝えられ、僕は紛れなくあるがままの僕の五体を、無窮の行路に賭ける心地である。

すると、僕は確かにこの道をこんな状況で、三万年の昔に歩いていたという妄想に捉われた。

このとき彼は、「総ゆる発端の審美の分岐は、このような原始の生存の情に発するのではないか」と思い至る。と同時に、「僕が如何ように逸脱し惑乱しても、己に繋がる天地の保育の情から脱落する事はまずあるまいと」、「思いがけぬ自愛の歓喜に、よろめくばかり」に感動する。

そして、この「六塘で感じ得た僕の異様な幸福」をいわば「紛れのない実感」として確認したうえで、「僕は屈託なく己の肉感の情に即いて、自他判別の拠点とする」といい、また「鋭感の戦後派諸兄が、未曾有の錯落の時期に堪えつつ、悠遠の旅情に還ることは、僕の衷心からの期待である」と述べる。

このエッセイが檀一雄の再生に重要な位置をしめていることはあきらかで、だから彼は「動顛したこの日頃の私の心を、昔の発端の心に重ねたい」（『リツ子・その愛』）と願い、「生存の根源の意味を自覚し、たしかに生きていると己が信じ得られる日」（『わたしは発言する』）を夢想する。「発端として、起点として、もしあり得るなら無垢の生命というものを私の心身の中にひっそりと育くんで、周囲に浮沈する新しい文明を、おのずと湧く自分の力と声だけで監視して見よう」（『リツ子・その愛』）というわけだ。

「悠遠の旅情」は「天然の旅情」と同義と見なしてさしかえなく、それが「旅情」とよばれたゆえんは、「旅とは好奇の旅情を負うて歩むものではない。己の心の平衡を匡すのだ」（『リツ子・その愛』）と彼にとらえられているからにはかならない。

だが、「悠遠の旅情」なり「天然の旅情」に身をゆだねて「天地のうちふところに正しくつながれていると自覚しようとし」（『わたしは発言する』）たところで、あの六塘での至福体験が檀一雄の戦後の日常のなかに再来し、恒常化しようはずもなく、それはいわば憧憬として肥大しつづけ、一方で現状への不満がしだいにつのることとなる。

わりきっていえば、リツ子と連作を書きつぐなかで自身の方向を見定めていった檀一雄は、『リツ子・その愛』（作品社、昭25・4）『リツ子・その死』（同前）の上梓と、さらに「長恨歌」（『オール読物』昭25・10）「真説石川五右衛門」（『新大阪新聞』昭25・10）「26・12」による第二十四回直木賞の受賞などを契機にジャーナリズムに忙殺されていった。それからちょうど十年後、彼は「文士十年説」（『新潮』昭35・4）と題するエッセイで、みずからをこう裁断する。

では、我ら凡百の文士はいかようにしてジャーナリズムと抱合しながら現在生き耐えているかと云う問題が残る。

ありていに云えば、おのれの魂を売渡してしまっているのである。

これが適切な自評かどうか、いまは問わない。さしあたって注目すべきは、「おのれの肉感を文章に表出する」という操作は、実に非常に緩慢で厄介な事業」なので「とてもジャーナリズムなどというような迅速の営団」の要請に応じられるものではないとの理由から、自身をこう裁いていることだ。

もとより、この時点での彼はこう裁く目を手にしているということでもある。じじつエッセイは、こう閉じられる。

私は今にして魂を取戻そうと思立ったが、間に合うかどうか。それよりも、売り渡した魂が、果して自分の体に返ってくるかどうか。

もうひとつ、ほぼ同じ頃のエッセイ「作家精神のありよう」(『朝日新聞』昭34・11・10)をも見ておこう。

彼はそこで、「永年疎遠になっていた自分自身と実に久しぶりにこっそり会って、身の行末をブツブツとささやき合っている」こと、「しばらくこのバカバカしい規模で演出されつづける現代という狂乱の世相からズレてみたい魂胆」をもっていること、さらには「現代のマスコミが生産しているところの『作家』というものは、時に、いやしばしば、とりとめのない幻影でしかない」ことなどを語った

あとで、こう決意を披瀝する。

私は幻影の作家から、おのれを作家であると自認出来る状態に育成してみたいのである。現代が私を見棄てるならば、いさぎよく乞食しながらでも、天地に对应し、市井に放浪して、人手にゆだねない自分の生活と抵抗をこころみるまでだ。

これらのエッセイが昭和三十四、五年に書かれていることからして、檀一雄がなにを狙っているかは、もはやあきらかだろう。

翌三十六年九月、のち「火宅の人」第一章にあたる中篇小说「微笑」が、かくて「新潮」誌上に発表される。

以後、「キリギリス」(『新潮』昭50・10)まで、およそ四百字詰千四百枚におよぶ連作長篇が書きつがれてゆくわけだが、あらためてそのうち「有頂点」(『新潮』昭41・8)から、「私」がそのまま作者自身とかさなるようにして過ぎし日々を思いを馳せるくだりを見ておこう。

あの頃の私の状態と云うものは、今自分で考えてみても、あまりはつきりとはわからない。ただ、私のいのちのまん中のあたりに、浮足立った自愛とでも云ったような感傷があつて、その感傷が素早い疾走をつづけているのもあつたらう。(略)

その素早い驟歩には、私自身さえ、ついてゆくのを

ためらうような、異常な我儘さがあった。空白な、浮足立ったような、あてのない自由が……。それは、細君とか、恵子とか、特定の女達からの逃亡などと云った類いのものではない。

私と云う、とりとめのない逸脱の人間を、その逸脱の本源の混沌に還して、傷つくとか、破れるとか、愛するだとか、別離だとか、そのような女々しい人情につながることを一切拒絶した空漠のなかで、目にもとまらない、素早い、有頂天な、疾走をころもてみたかった……。とでも云おう。

ここから着目すべきキイ・ワードは、けっしてすくなくない。たとえば「自愛」、「自由」、「逃亡」、「空漠」などが、さしあたり、「その逸脱の本源の混沌に還」らんとする願いがすなわち「悠遠の旅情」、もしくは「天然の旅情」への実践にはかならないことをおさえておけばたりるだろう。

三

桂一雄の物語は、じつは檀一雄の事件があらまし結着をみたあとから始まる。

檀一雄が入江久恵と出奔し、山の上ホテルに暮らすようになったのが昭和三十一年八月のこと。のち浅草、目白、

麴町と移り住み、昭和三十三年十月末から翌年四月にかけて欧米旅行。しだいに入江久恵との仲にかげりが見えはじめ、昭和三十六年末には二人の関係も解消される。次郎の死は昭和三十九年十一月とすこし遅れるが、それら一連の事件の経緯については小島千加子「生」の巡礼者檀一雄―『火宅の人』後日記』（『三島由紀夫と檀一雄』構想社、昭55・5）や野原一夫『人間檀一雄』（新潮社、昭61・1）に詳しい。

「微笑」の発表はつまり、昭和三十六年九月。入江久恵との離別もなかば決定的であったにちがいない時期を起点にし、「火宅の人」は桂一雄のいわば現在の物語として、「かなり忠実に書かれた私小説」（入江隆則^{注4}）ふう^{注4}に、一気に語りすめられてゆくのである。

檀一雄自身はただし、「一番最初の『誕生』を書いたのが昭和三十年、テープに吹き込んだものを基にして、推敲を加えてこのほどやっと最終章の『キリギリス』を書上げたわけですから、この作品は完成までに二十年かかったことになりました」（『われ天涯に一人』）と、その起筆を「誕生」（『新潮』昭30・11）に遡って認めている。じっさい「微笑」は、それ以前の「誕生」、「残りの太陽」（『別冊文芸春秋』昭31・8）と「波打際」（『中央公論』昭32・6）の三篇の記述の過半を生かし、あらためて百枚ほどの中篇小说に練り上

げたものであるから、そういう意味では起点を「誕生」にもとめることもできなくはない。それら三篇のなかに、次郎発病のいきさつ（「誕生」）も、「自分を天然の旅情に向ってどえらく解放してみたい」願い（「残りの太陽」）や、「恵さんと事をおこした」（「波打際」）ことなども、すでに書かれている。

にもかかわらず、「火宅の人」は、やはり「微笑」に始まるといったほうがあたっている。なにより、「誕生」以下の三篇は、作者とおぼしい「私」の物語ではあっても、桂一雄の物語とはいえないからである。

桂一雄とはなにか。

その造型に作者は自覚的だったはずで、エッセイ「我が証言」（『新潮』昭38・8）から、それがうかがえる。そこで檀一雄は「仮りに『惑いの部屋』と名附けた連作^{注5}」を「私のとりとめのない痴愚の物語」とよび、さらにこう言っている。

ここに架空の人物を拉致し来って俎上にのせ、人間発端の混沌とデカダンにまで墜落させてみても、いっずれ、物語だと、人は関心を示すまい……。それならば、いっそ、私は私らしい人間を飄蕩させ、その愚行を時には上塗りしてまで、煽情を求める人々の関心と、反応と、批判の眼にさらしてみようと思ったただけだ。

すなわち作者の意図からすれば、「私らしい人間を飄蕩させ、その愚行を時には上塗りし」たのが、桂一雄という一個の「痴愚」なのだ。

だから、たとえば「波打際」の次のような箇所は、「微笑」では削られている。蒲団のうえで泣く恵子に向かって、「Dさん」とよばれる「私」が語ることばである。

「じゃ、僕も云おう。僕は愛が不変なものなどと信じてやしないけど、唯今あなたを愛しているつもりでおりますよ。しかし愛しているなどということは、何の証言にもなりやしない。あなたがどうであったしろ、僕は重大な過失を犯したことを卒直に認めます。何故なら、僕に妻子を抛り出す勇気が無いんだもの……。卑怯です。全く身勝手な言い分だ。僕は自分でつぐなえないことで、あなたを誘惑した結果になっている。だから、僕は僕の収入の続く限り、（略）月々二万円づつその償いをすることにします」

これは檀一雄ではありえても、桂一雄ではない。こういったいわゆる良識とか世間智を、桂一雄は「痴愚」であるために、もちあわせてはならないのである。

この差はおおよそ決定的だといわねばならない。なぜ「痴愚」かはしばらくおくとして、「痴愚」であることこそが桂一雄のレゾン・デートルだといってよければ、「微笑」

とそれ以前の三篇のあいだの懸隔はおおうべくもないからである。

さきに見たとおり、檀一雄は昭和三十四、五年頃から「魂を取戻そう」（『文士十年説』）と、「永年疎遠になつて自分自身と実に久しぶりにこっそり会って、身の行末をブツブツとささやき合つてい」（『作家精神のありよう』）た。やがて入江久恵との離別に際して、なに、かを彼が納得したいと願つたであろうことは想像にかたくない。

「我が証言」の次の一節は、たぶんここに読みあわせられてしかるべきだろう。

私はこのように産み出されたものであり、このようにして生きているのであり、またこのようにして亡んでゆくという、あわれなありようを、おそらくは自分自身に向つて、覚束なく証言し、覚束なく納得させて、わが鎮魂のよりどころを得ただけの物狂おしい衝動が、この作品を私に書きつなげたおもな動因をなしていたかも知からない。そこに巨大な神の摂理を感得して、われら浮塵子にも見紛う生命のがわのとりとめのない悲喜愛憎を、こっそりと天に還したいほどの意気込みであつたと大仰に云えば云つてみたつて別に差支えはなさそうだ。

檀一雄が入江久恵と「事をおこした」直後に「わが鎮魂

のよりどころを得ただけの物狂おしい衝動」に駆られたとは考えにくい。「巨大な神の摂理を感得して、われら浮塵子にも見紛う生命のがわのとりとめのない悲喜愛憎を、こっそり天に還したいほどの意気込み」をもって、それが連作として構想されるには、やはりその事件がまさに終息せんとする時期あたりがふさわしい。

檀一雄は入江久恵と離別してから「石神井の自宅に居ることが多くなつた」（石川弘編「年譜」^{注6}）らしいが、桂一雄はいよいよ「目にもとまらない、素早い、有頂天な、疾走をこころみ」（『有頂天』）る。檀一雄が事件の「後始末」（小島千賀子^{注7}）にころろを砕いたことなど素知らぬ顔で、桂一雄と名のる「痴愚」はなお、「パリの雑踏の中から、またぞろ第二の菅野もと子、第二の実吉徳子をでも拾つて、素早くインスブルックとか、カサ・ブランカあたりまで、逃げ出して行ってしまいたい」などとうそぶいている。

檀一雄があつて、分身は作者の傀儡でもミニチュアでもない。

今後もし、私が私小説と云うものを再現するとしたならば、私自身の妄動し、変転する生存の愉悦に重点を置きながら、なるべく拡がりの方に……、なるべく柔軟な光りの方に……、豊かで、惑いに満ちた展開をこころみてみたい。

これはとりもなおさず、私小説に対する復讐と云うことにもなりかねないけれども、しかしながら、作品というものが、自分自身の恢弘、乃至は自分自身の鼓舞激励に向うとするならば、なるべく豊饒に向って誘導されなければならないと、信ずるからである。

この「風土と揺れる心情と」(「問題小説」昭48・10)の言説は、なにも「今後」にかぎるわけでもなからう。「時のふるいの中で」(「われ天涯に一人」)、桂一雄は「痴愚」としての面目を存分に発揮する。もとより、「豊饒に向って」だ。

四

大江健三郎は「道化と再生への想像力」(「新潮」昭51・3)のなかで、文化人類学者によるトリックスター(道化)の定義を引きつつ、『野火』と『火宅の人』のヒーローである遊行する道化Ⅱ今日のトリックスターの、ついに達成されることのない宇宙論的次元の遍歴の完了と、やはり個人的な限界を乗り越えられずに流産するカーニバル志向について「語っている。「さまざまな『現実』を同時に生き、それらの間を自由に往還し、世界をして、その隠れた相貌を絶えず顕在化させること」(山口昌男)や、「道徳的、あるいは社会的な価値は持たず、情念と食欲に左右されている

が、その行動を通じて、すべての価値が生まれてくる」(ポール・ラディン)のがトリックスターの特性なのだとすれば「野火」や「火宅の人」はまさに「その道化たちのカーニバル」にはかならず、ただし「具体的に未来に向う祝祭的な民衆性」の欠如ゆえにその「カーニバル」は「流産」せざるをえない、と彼はいうのである。

「今日のアジアにおいて、まことに多様な側面から迫ってくる死をくぐりぬけて日本人がどのように再生するか」という大江健三郎のもっぱらの関心にそって、いま「民衆性」や「流産」の問題に立ち入る余裕はないし、またそれは「火宅の人」のあとの魅力ある話題でもあるだろう。

さしあたって示唆的なのは、「痴愚」をこのように「遊行する道化Ⅱ今日のトリックスター」とよびかえてみれば、桂一雄とその物語のもつ意味がより明快に浮かびあがってくることだ。

「道化」がそうであるように、桂一雄もまた、「道徳的、あるいは社会的な価値は持たず、情念と食欲に左右されている」(ラディン)。「現代の娼捨先生」と自称し、「愛」を排して「情痴」につき、「ばかばかしい妄動の性癖」に身をゆだね、ときに檀流ならぬ桂流クッキングに狂熱する。

「私は自由が欲しかったのだ」、と桂一雄は述懐する。「私は、いつも彼女らから逸脱して、自分の指顧できる明

瞭なおのれの祝祭の中にばかり生きつづけてきたことを自覚するのである。その淋しさがどうであれ、その淋しさの中にだけ、湧き立つような生甲斐を見出してきたものだ。

じつは大江健三郎の指摘をまつまでもなく、桂一雄みずから、その脱社会性と自由を志向する日々の「祝祭」性を「自覚」しているわけで、そういえばなるほど、これまた大江健三郎が気づかせてくれるのだが、この「道化の祝祭」は周到なことに、次郎の発病に始まり、そして次郎の死に終わっている。

大江健三郎は、こう述べる。

さてこの小説の冒頭に象徴的にあらわれるのは、日本脳炎の後遺症の少年である。僕は自分自身、知恵遅れの子供を持っている父親としての経験から、そのような子供が、家庭という構造のなかのいわば構造的劣性として、その全体の構造をいかにダイナミックに緊密にするものかを知っている。少年は家の外へ自力で一步も歩き出すことはないが、したがってジェット機で世界中を遊行する道化Ⅱ今日のトリックスターの父親と行動をとにもすることはないが、しかしかれはその父親の存在の全体性に不可欠の構造的劣性であることにまちがいはない。少年の突然の死は、道化Ⅱ今日のトリックスターの父親にそれ以後の遊行への意志を

本質において崩壊させてしまう。じつは少年の死の時点でこのヒーローは根源的に進退きわまっていたのである。

それにしても、なぜ次郎が「その父親の存在の全体性に不可欠の構造的劣性」なのか。

次郎が、ではなくして次郎の「微笑」が、といいかえたほうがより適切だろう。

この「次郎微笑」は、人間と云ういきものの微笑には余り似ていないかも知れぬ。しかし愚かな私にとっては、モナ・リザの微笑より、大英博物館の鼻欠け美人の微笑より、何層倍も正しく、また美しくさえ感じられる。まったくのところ、これが私の鎮魂のよりどころだと云っても、決して云い過ぎではないだろう。

なにげなく読み過ぐすべきではない。この「次郎微笑」が「美しくさえ感じられ」、「鎮魂のよりどころ」ともなるのは、なによりそれが「人間と云ういきものの微笑」より「何層倍も正し」いからだという。

次郎は「私の大声を聴くと、瞬間、蒼白な顔のまん中に、クッキリとした喜悦の色を波立たせて『ククーン』と世にも不思議な笑い声をあげる」。

そうだ、「ククーン」。あの笑い声は、ひょっとしたら、馬の笑い声に一番似ているかも知れぬ。

彼がいうには、「まだ、しらじら明けの空の光は弱く、蛇口から噴きこぼれる水の音だけが太初のように低いつぶやきをあげて流れ出している静かな時間……。時によって、馬は黎明の星を嚙み込むように、馬面（うまづら）を心持空に反らせ、『ククーン』と笑うことがある」。

ひと（いや、ほかの馬）に聞かせる笑い声ではない。暁の空に向って、ひとりつぶやくような、自足の、満ちたりた、淋しい、幽玄の笑い声なのである。

ひよっとしたら、次郎の笑い声は、あの馬どもの笑い声が一番近いと云えるかもわからない。おなじように、ひとりつぶやくような、満ちたりた、淋しい、幽玄の笑い声なのである。もう、人に対する笑い声ではなく、太虚に向って、ひそかに自足しているような、あてどのない響を立てるのである。

こう桂一雄は語る。背後で作者がかさねて想起していたのは、あるいはあの六塘での至福の体験——より正確にはそう決定的に意味づけられた体験の記憶であったかもしれない。

いずれにしても、彼の認識では「太初」にあって人間は、「天地のうちふところに正しくつながれている」（「わたしは発言する」）。そこには「正しい自然への連繫」（「リッツ子の愛」）がある。

だから、「次郎微笑」は「何層倍も正し」い。「次郎微笑」そのものに次郎の存在の全体があることからすれば、すなわち次郎は誰より「何層倍も正し」い。

その△正しさ▽の顕現としての次郎が、ひとまず「その父親の存在の全体性に不可欠の構造的劣性であることにまちがいはない」（大江健三郎）。が、それをただちに、「家庭という構造のなかのいわば構造的劣性として、その全体の構造を（略）ダイナミックに緊密にする」（同前）といいかえることにはすくなくならぬ無理がともなうだろう。

「家庭」は共同体なり社会、もしくは文化とおきかえてもかまわないのだが、大江健三郎の関心にもかかわらず、そのような意味での△祝祭▽の構図は、およそ「火宅の人」にはないというしかない。

よく知られていることを承知のうえで、あらためて次の記事を眺めてみよう。

29年 8月9日 奥秩父ニテ落石ニ遭イ、助骨三本ヲ折ル

30年 8月7日 次郎発病、日本脳炎ト診断サル

31年 8月7日 恵子ト事ヲ起ス

桂一雄の見立てにつられて、時日の符合のみに気をとられてはならない。これらの異変、がいずれも祝祭性のつよい夏のただなかに起きていること。落石事故についても、そ

れが「人里離れた閑静な」奥秩父の溪谷に「大はしゃぎ」で酔い溶けているさなか、まるで天啓を思わせるような「拳大の石塊」が彼を不意打ちにしていること。骨折による入院生活がそれまでの彼の日常を一時的にしる中断していることなども気づいておくべきだろう。

落石事故から一年、ふたたび天啓が彼をうつ。その日も彼は二泊三日の旅から戻るやネオンの巷を徘徊し、明け方近くに帰宅する。^{注8}「まるで炎暑を抱きよせるよう」な「昏々と」した眠り（ここにも祝祭がある）から目ざめると、痙攣で「奈落の果を泳いでいるよう」な次郎の修羅の光景が待ち受けている。

「次郎。次郎」と大声をあげて呼んでみたが、全身の痙攣だ。額に押しつけている氷囊の下に、もがいている。折から正午の照り返しと、木の葉の反射を浴びて、青ざめくねっているその次郎の姿が、何か新しい野獣の精気をでも帯びているように感じられた。

このとき桂一雄はまさしく「正午の照り返し」のなかに、「新しい次郎」の誕生を直覚しているし、やがてその「類い稀な鎮静の微笑」をわが「鎮魂のよりどころ」としつつ、「時折たわむれに『神様、仏様、次郎様……』と次郎の耳につぶやく」。次郎はほとんど「天地のうちふところ」に正しくつながれている（「わたしは発言する」）からだ。

かくてそれから一年、いわば落石事故を序曲として顕現した「新しい次郎」の誕生をてこに、彼は「いつの日にも、自分に吹き募ってくる天然の旅情にだけは、忠実でありたい」と切実に願ひ、「自分から爆弾を仕掛けるよう」にみずから意志して矢島恵子と姦通する。

矢島恵子との姦通がそこに選ばれたのは、なかば偶然であつたろうし、あるいはまた、桂一雄が自解するように「その大本に、私自身の、青年時代への郷愁があるとも云えるだろう」。ともかく彼は、いふなれば次郎のうえに△天▽の降誕を見てとり、「天然の旅情」に身を挺したのであつた。太宰治の文学碑の除幕式参列のためという、これまた祝祭の日――。

ゆえに以後の彼が、「新しい次郎」に導かれて、在るのは当然のことだといわねばならない。

恵子と結婚する……、何度もそう思う……、その都度、次郎のくねる手足、不思議な微笑が浮び出してきた、いけない、いけない、と自分の首を振る。すると、弥太、フミ子、サト子の、泣き声までが、一斉に耳許にわめき寄ってくるのである。

これは次郎が、そして子どもたちが父親を自分たちの家庭によび戻している場面なのではない。妻とであれ、愛人とであれ、結婚とそれにつづく家庭の生活から、彼らが彼

らの生きる「天地のうちふところ」へ引き戻している凶なのだ。

だから、桂一雄はさらに△姦通▽をかさねなければならぬ。「おシメの旗をひるがえ」す堅実で生活力にたけた妻から、奔放で「天成の媚を知っている」矢島恵子へ。ホテル暮らしからアパートでの同棲に移るやスウェーデン刺繍を楽しむ結婚を期待する矢島恵子から、旅先の女たちへ。さらには「まるで天人の翼を得たように、奔放になり、自在になり、とめどない機智を得て、手の舞い足の踏むところを知らない」葉子（実吉徳子）へと、彼は憑かれたように向かう。

旅先の女たちはいうにおよばず、じつは葉子とてひとときの祝祭を楽しんでいたにすぎない。二カ月におよぶ九州旅行にこころあたりと見切りをつけ、「お葉は、まったくあっけなく、長崎から東京へ引揚げてい」き、やがて「旦那持ちにな」る。

桂一雄は帰らない。「次郎微笑」に導かれて在ろうとするかぎり、彼は帰れないのだ。

ほぼ時を同じくして、次郎の死が訪れる。これによって「このヒーローは根源的に進退きわま」（大江健三郎）る。

眼前ので、慰め導く△天▽の顕現が消失したのだから、同じ物語のなかを桂一雄は生きることができない。という

ことはつまり、「火宅の人」の物語は、この次郎の死をもって幕を引かれざるをえない。

五

桂一雄は「次郎微笑」という眼前ので、をなくすことで失速した――、大江健三郎のことばをかりていえば、「少年の死の時点でこのヒーローは根源的に進退きわま」た。ひとまず、そういっておいた。それを裏打ちするかのように桂一雄が最後に、「第二の菅野もと子、第二の実吉徳子」との邂逅を夢想するくだりは、いかにも空回りの感がつよい。

だが、失速し「進退きわま」たのは、いわば△道化▽としての桂一雄にすぎないのではないか。△道化▽の物語が終わったところから、彼は一方でもうひとつの物語を生き始めているのではないのか。

「火宅の人」の終章「キリギリス」は、こう閉じられている。

私は、ゴキブリの這い廻る部屋の中で、ウイスキーを飲み乾しながら、白い稲妻と一緒に酔い痴れの妄想を拡げているが、次第にサラサラと自分の身の周りに粉雪でも降り積んでくるような心地になった。

この最末尾の一節を檀一雄がたぶんはやくから書きたが

っていたのであろうことは容易に想像がつく。

△火宅の人▽連作は当初、「寂光」(「新潮」昭38・7)のつぎに「あと一回、百枚ばかりの『楚歌』を書き終えれば、(略)ほぼ完結を見る筈だ」(「我が証言」)と考えられていたらしいが、それよりはやく「風の奈落」(「新潮」昭37・3)のなかに、すでに結末を思わせる記述が顔をのぞかせている。

浅草のアパートの一室に二人が棲み始めてからのこと、ひとり部屋に残った桂一雄が「不思議な空虚の中に坐りこんで、ちりぢりのわが半生を回顧」していると(これまた「正午」頃のことだ)、「サラサラ、サラサラ。よく乾いた、低い、聞き馴れない音が聞えてるような心地」にとらわれる。

私は耳に鳴ってくる奇異な音をいぶかりながらも、目を開こうとはしない。いや、眠っているに相違ない。ただその夢幻の中で、なにもものかのどえらいかなしみを感じとっている。かなしみか? かなしみなどと云うような有機物につながる思い出ではない。空漠だ。そう、空漠。その空漠をかすめてよぎっている宇宙塵の音でもあるのかもわからない。

そうするうちに「その不思議な幻聴は鳴り鎮まって、今度は平凡でおだやかな地上の己の墓石が見えてきた」とい

うわけで、彼はあの「石ノ上ニ雪ヲノ雪ノ上ニ月ヲノワガコトモナキノシジマノ中ノ憩イ哉」という「墓碑銘」をノートに書きしるす。

「風の奈落」が入江久恵との離別直後に発表されていること、檀一雄が「わが鎮魂のよりどころを得たいだけの物狂おしい衝動」(「我が証言」)に駆られていたと述懐していることなどを思いあわせれば、このくだりがいささか唐突なまでに書かれてしまった事情も納得がゆくのだが、いずれにしろそれは物語の展開からして性急にすぎたといわざるをえない。

同じことは当初の完結予定だった「楚歌」(「新潮」昭39・2)についてもいえる。そこにもまた、やはり次のような箇所がある。

私はビールを一本、助骨のヒビをうるおしてやる心地で喉元に流し込み、蒲団の中にもぐり込む。ウツラウツラと眠ったり、また目覚めたり。それにしても、何という閑寂であろう。時折鎌首をもたげるようにして、廻りを見まわすが、サラサラと乾き切った蘆のざわめきと、その揺れる葉に、とまろうとしてはまたひるがえる蜻蛉の姿ばかりである。

しかし、夜は凄涼とでも呼びたいほどの孤独であった。(略)すると、どういいうわけだろう、恵子のこと

もとうとうこれで終わったな……、とにわかにか攔みかかれるような悲愁が襲いよってきて、蘆の葉擦の音と一緒に、その悲しみはひろがるばかりである。

ここにもまた、「サラサラ」と聞こえる音が響いている。「サラサラ」は、「蘆の葉擦の音」でも、「宇宙塵の音」でも、「粉雪」の降り積む音でも、なんでもかまわない。とにかくそれは「閑寂」や「悲愁」や「空漠」が身をおおい、つらぬき、放心させるときの音なのだ。

その静謐の音を、一時の白昼夢のなかにではなく、いわば八永遠の現在に聞くために「火宅の人」は書きつがれたといつてもよいかもしれない。

「キリギリス」は、次郎をなくし女たちとも訣別した桂一雄が「どこぞ、劃期的な自分の居場所を見つけ」るべく、神楽坂の「Kホテル」に身をよせるところから始まる。

ここへ辿りついた私はもとより、家出人だ。十年來うつつを抜かしていた女とも切れ、その時々の虹のよくな情事を断続した女とも訣別の酒盛を終え、長らく心にかかっていた次郎にも死なれ、あとは云ってみれば自在空……。

何ものにも捉われるな！ 今からこそ充実した生命いのちの誘導と点火。自分自身の思う存分の自我道？

アハハ、夏は終わった。さよう、世の有様の、デパー

ト即売式の規格人生は悉くかなぐり捨てた。

こう考え「愉快が止まらない」彼は、「ざまを見る。これからが私の人生だ」、「万歳！これが私の本当の夏」と心に叫ぶのだが、しかし、これで彼の「本当の夏」が到来したわけでもないだろう。

「自在空」、「自我道」、「デパート即売式の規格人生は云々」、いまだ彼はこれまでどおりの憧憬を——あえてネガティブにいえは空念仏を、くりかえしているにすぎない。じじつ、「前人未踏の空漠の花のブーケ」などとかけ声のみ大仰になるばかりで、またしても彼は、小娘との一夜に「空々漠々の徒労のようなもの」を感じて「憂鬱」にふさぎこんだり、その気晴らしによびよせた「S女」に翻弄されたり、さして以前とかわらない。

当然だといつてもよい。彼は次郎に死なれたのであって、殺したのではない。女たちから去られたのが実情で、彼が断ち切ったのではない。そのようにして「夏は終わった」のであれば、そのあとにはやがて翌年の夏がやってくるのが必定ではないか。

「本当の夏」を迎えるために、桂一雄は女たちを葬り、次郎を復活させねばならない。

それを彼が果たすのは、「秋の稲妻」が明滅し、部屋のなかにゴキブリが這い廻り、ガラス戸の外にはこおろぎが

侘しく鳴く、そういう「凄凉を通り越」さんばかりの、あの夜のことである。

キリギリス牀下に入る、と云うけれども、ここは五階だ。そのどこの部屋の壁とはつきりしないが、窓壁にリリリ、リリリの、夜気を震わす思いつめたような声がある。

都会の真ん中、時たま聞えてくるのは自動車の疾走音、酔い倒れた男達の呻き声だ。

その都会の、空間と時間の不思議な裂け目の中に、まるで、にじみこむような声を上げるのである。

生滅というものがそもそも何であるか。

このキリギリスは、その無残をよく知っていて私にまっすぐ語りかけてくる心地がする。

刮目すべきは、このとき彼が「空間と時間の不思議な裂け目の中に」、いかえれば「永遠の現在」のなかに、つまりは身を置きつつあることだろう。

そうしながら、彼は矢島恵子と、彼女につながる女たちをめぐる思いにゆれている。そのとき、不意に「正覚」(「我が証言」)が訪れるのだ。

私は、たった一つ、この宿にぶら下げてきた風呂敷包みの古靴を取出しながら、そのカビだらけの靴を、はいてみるか、それとも棄ててしまうか、不快断な焦

慮をもてあましている。

すると咄嗟に、

なーんだ！ オレ、ヒトリボッチ！

私はいぶかしく、自分の身の周りを眺めまわしながら、今更のように、孤影情然の、オノレの情況に気がついた。

そこで大アワテの思い入れになってみたが、いや待て！ 今日が日まで、自分のヒトリボッチに対してこんなメザマシイ程の初い初いしさを、感じたことがない。

彼が「ヒトリボッチ」と気づいたことのみを目をうばわれてはならない。ここに読みとるべきは、あれかこれかの選択の次元を超えて、彼が「不決断な焦慮」を脱したということであるはずだ。

あとひとつ、この部屋いっぱいゴキブリがいることも見過ごすべきでないだろう。「ゴキブリはいよいよ盛大を極め、壁を這い、板の割れ目に隠顕し、天井から飛び廻る有様」であったといい、「部屋の主人は、百万のゴキブリの大軍団をうしろにひき従えて」いる。

ゴキブリがおよそ三億年前から棲息し、たとえば核戦争による人類の滅亡のちも生きのびるだろう、原始的生命力のつよい虫であることはよく知られているよう。とすれば

桂一雄が降り立った場所とは、もしそれを△永遠の現在▽
と云ってよければ、まさにゴキブリの△生▽とかさなるの
ではないか。彼は処世とは無縁の「ゴキブリの王者」と自
称する。「私と云う、とりとめのない逸脱の人間を、その
逸脱の本源の混沌に還し」たいと願う彼に、ゴキブリが親
しく感じられるのに不思議はない。

のみならず、このゴキブリは、じつのところ次郎の転生
のすがたではないのか。「何か新しい野獣の精気をでも帯
び」て再生した「新しい次郎」が、さらにそのグロテスク
な相貌をつよめ、より根源のかたち似て、「百万のゴキブ
リの大軍団」となって、その父を導いているのではないか。
桂一雄はふたたび次郎に導かれて、もうひとつの物語を
生き始める。それまでの桂一雄が失速し、それまでの物語
が閉じられるのはこのためにほかならない。新しい物語
が古い物語の表層的な変^{ヴァリアント}奏ではない以上、「第二の菅野
もと子、第二の実吉徳子」への夢想がどこか空疎にうつる
のは当然のことなのだ。彼はもはや、あれかこれかの選択
のなかには生きていないのだから。

六

△火宅▽が法華経譬喩品第三「三界無安、猶如火宅」を
典拠としていることはよく知られている。そういう文脈か

らすれば、桂一雄は輪廻を脱して「正覚」に至った、とい
ってみることもできるだろう。

もとより、それはあるひとつの安定した境地などではあ
りえない。いわゆる精神や情緒の慰戯をことごとく排し、
原初の混沌のとりとめのなきにつこうとする彼にあって、
ついに境地は無縁のはずだ。

作者みずから、「火宅の人」とは、孤独の喜びを自覚す
るまでの長い時間の物語だ」と語っていることはさきによ
れておいた。素材となった事件が「長い時間」つづいたの
ではない。その「物語」が「長い時間」をかけて語りつむ
がれてきて、そのはてに「孤独の喜び」が「自覚」される
に至ったわけで、それが得心のゆくかたちをとるために、
当初のもくろみをはるかにこえて桂一雄は姦通し、道化を
演じなければならなかった。

それで涅槃^{ニルヴァーナ}にも似た境地に彼が達したのだとすれば、
いったい桂一雄は何のために姦通をくりかえしてきたとい
うのだろう。「正覚」は彼にたしかに訪れた（それはいつ
でも不意にやってくる）。が、そこに彼がやすらぎ憩うの
ではないことはあきらかだ。

てみじかにいえば、たえず△姦通▽をくりかえす運動の
力学が、彼に「正覚」をもたらしたのだ。運動を休止する
と、たちまちそれは霧消する。だからこそ、桂一雄はどこ

へも帰らず、「第二の菅野もと子、第二の実吉徳子」をまたもや夢想する。

「己の天然の旅情にだけは忠実であれ」とみずからを鼓舞するところに、なにより桂一雄のめざましい本領があった。「天然の旅情」とは放浪者としての位置を端的に語っている。原初の混沌を志向し、もって今日の文化のいびつさを破碎する、そういういわばさまよえる道化が桂一雄なのだといつてよい。

彼の武器は△姦通▽だ。△姦通▽をもって今日の文化と挑発的にかかわりあうこと、たぶんそれが彼をこちら側に引きとどめ、みずからの陥穽に落ちることからも救ってくれているのだろう。

△姦通▽はたぶん、そういう挑発性にみちた装置でもありえるのだ。

注1 たとえば浮気とか不倫といった呼称自体に、制度の日常性からの一時的な離反という意味づけがすでになされているよう。上野千鶴子のことをかきれば(注2)、「『姦通』はこれまでもずっと、法的に拘束された一夫一婦制のなくてはならない『必要悪』、『補完物』と信じられてきた」。

注2 上野千鶴子「ふぞろいなつがい——ロマンチッククラブ・イデオロギーの解体」(『ぎ』32、昭61・6)

注3 檀一雄は昭和十九年七月から翌年五月にかけて、報道班

員として湖南作戦に従軍している。この体験はその折のものであったはずで、とすればこのエッセイの執筆は昭和二十一年、二年ということになる。

注4 入江隆則「神仏の孤独——檀一雄小論」(『新潮』昭51・3)

注5 「サムとアントニオ」(『芸術新潮』昭42・1)に至ると、「永年私書きついで『火宅の人』と仮題している小説集」とある。あるいは葉子の登場(『有頂天』)などで、部屋におさまりきれなくなったものか。

注6 石川弘編「年譜」(『檀一雄人物書誌大系2』)日外アソシエーツ、昭57・5)。

注7 小島千賀子「『生』の巡礼者檀一雄」(『前出』)に、「三十六年の終りに結着のついた『恵子』嬢のために、保証した住居を違約なく渡すのが先生に残された後始末であった。云々」とその顛末が語られている。

注8 「誕生」では、このくだりは「旧知の女性」が勤める「BB」という酒場へ行き、「その女と腕を組んで、深夜の酒場から酒場を渡り歩き、いつのまにか大勢よっている友人達の哄笑のなかを、なるべく破廉恥に腰を抱えては踊る。云々」と祝祭性があらわで、そこから「新しい次郎」の誕生が準備される。